

克己心

～自分に負けない心～

夢を語り、夢を追う生徒
笑顔 続ける 支え合う

【学校だより】
平戸市立平戸中学校
令和8年8月9日
文責 原田 誠 第14号

平戸中学校 平和祈念集会

本日、平戸中学校において「平和祈念集会」を実施しました。主担当の三好先生を中心に、西村先生、吉井先生、そして生徒たちで「平和集会実行委員会」を立ち上げ、今日の日に向けて準備を進めてきました。実行委員会のメンバーは、委員長重盛晴翔さん、副委員長山口蒼さん、柳本鼓太郎さん、委員銀吉屋菜歩さん、松瀬充美さん、高本葵梨さん、吉住幸さん、横山朋矢さん、畑中研人さん、北村基さん、市川舞さん、大島のんさんでした。今年度の集会では、学年ごとに以下のようなテーマを設定し、それぞれの代表生徒が学習の成果を発表しました。（1年生：「長崎・広島原爆」 2年生：「特攻隊」 3年生：「世界の紛争・平和」）

発表の後には、実行委員による「読み聞かせ」、そして長崎市で行われた平和祈念式典視聴、黙祷のあと「平戸中学校平和宣言」が読み上げられました。私からは、生徒の皆さんに、次のような話をしました。

～一部抜粋～

81年前の長崎では、たった一発の原子爆弾によって、多くの大切な命が失われました。家族と過ごす時間や、学校へ行くこと、何気ない毎日が、一瞬で奪われてしまったのです。

そして、生き残った人たちも、心や体に大きな傷を負い、苦しみながら生きてこられました。このような悲しい出来事を二度と繰り返さないために、多くの人が自分の体験を語り続け、平和の大切さを世界中に伝えてきました。

今、私たちが学校で学び、家族や友達と笑顔で過ごせるのは、多くの人たちの犠牲と、平和を守ろうと努力してきた人たちのおかげです。皆さんは今、自分の夢や目標に向かって成長している大切な時期です。もし、その未来が戦争によって突然なくなってしまったら、どう感じるでしょうか。家族や友達と離ればなれになり、学校へ行くことも、好きなことに挑戦することもできなくなる。そんな未来を望む人はいないと思います。

だからこそ、私たちは戦争の歴史を学び、平和について考え続けることが大切です。戦争は命だけでなく、人の希望や幸せまで奪ってしまいます。そのことを決して忘れてはいけません。

そして、平和を守ることは、特別な人だけがすることではありません。相手を思いやること、違いを認め合うこと、困っている人に優しく声をかけること。そのような毎日の小さな行動が、平和な学校をつくり、やがて平和な社会へとつながっていきます。（後略）

今日の平和祈念集会が、生徒の皆さんにとって、「平和」とは何かを改めて考え、今ある当たり前の日常の尊さに気づき、自分にできることは何かを考える機会となっていれば幸いです。

そして、長崎で学ぶ一人として、平和の尊さを心に深く刻み、その思いを未来へ語り継ぎ、平和な社会の実現に向けて行動できる人へと成長してくれることを願っています。

対話の大切さ訴え

「平和への誓い」を読む本村チヨ子さん

「隣の人と仲良くしてちょうだい。目と目を合わせて対話をしてちょうだい。そしたら戦争なんて起こらない」被爆者の本村チヨ子さん（87）は8日、長崎市の県被爆者手帳友の会の事務所で、中学生たちに「対話」の大切さを訴えた。長年、理容師として働いた。だが、被爆体験について積極的に語ることはなかった。

最初の転機は2006年。中1と小5の孫2人が戦争の実相を学ぶ長崎市の事業に参加し、沖縄の戦跡を訪ねた。小5の孫が長崎に戻って開口一番、言った。「ばあば、平和は祈るものじゃない。守るものなんだよ」

その言葉に「私はこの子たちに平和ということは何にも伝えていなかった」と感じ、2人の前で初めて被爆者であることを打ち明けた。平和活動を始めるきっかけになった。（中略）

自分をかばって大けがを負い、亡くなった祖母には「誓い」を読みあげる時、心の中で伝えたい。「あなたにいただいた命を、精いっぱい平和のために使い切ります」と。80年を経て、今だから、こそ。

2026年（令和8年）7月27日 月曜日 長崎新聞 21面

平戸中学校 平和宣言

- 一 私たちは、お互いの人権を尊重し、差別のない思いやりにあふれた学校づくりに努めます。
- 一 私たちは、自分が生かされていることに感謝し、自分や人の命を大切に、全力で生きていきます。
- 一 私たちは、被ばく県長崎の中学生として、平和について学び続け、戦争の恐ろしさを原爆被爆の体験とともに語り伝えていきます。

2026年8月9日
平戸市立平戸中学校
生徒一同